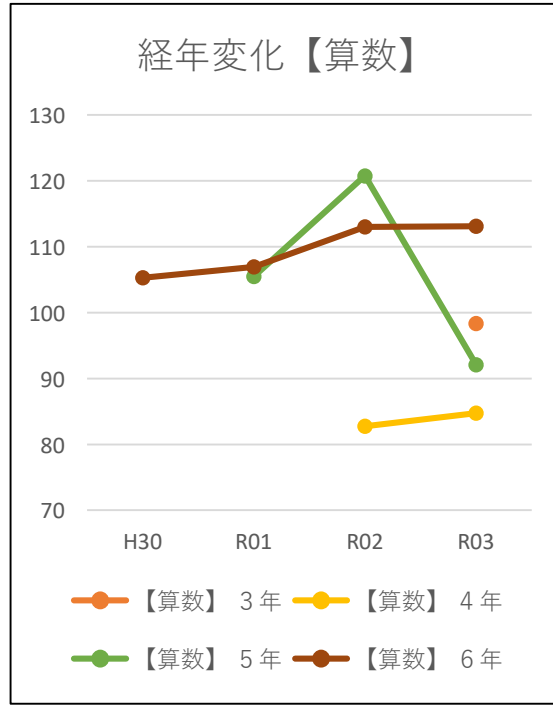
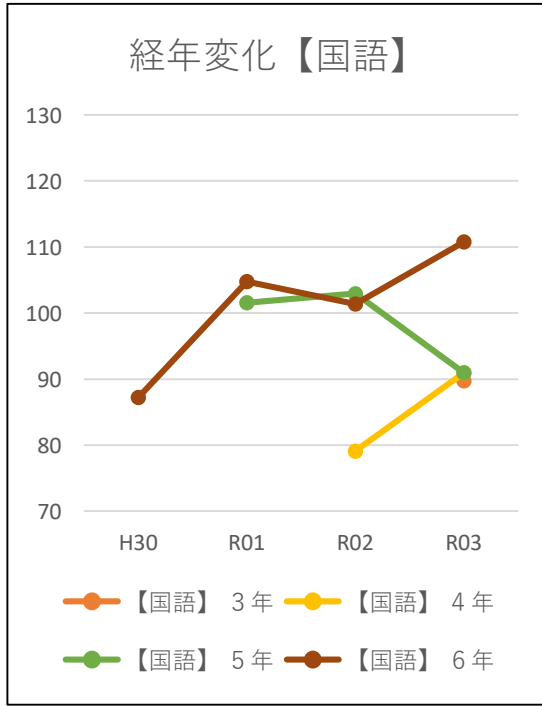


I 令和3年度末までの学力の状況把握(令和3年度 釧路市標準学力検査より)  
各学年の経年変化(目標値を100とした時の各学年の状況)



※釧路市標準学力検査結果の経年変化や到達度の割合から見られる各学年の特徴・成果・課題等

○3年生[現4年生]は、国語で目標値(100)を10.3下回っており、到達度でも評定1の割合が47.6と半数を占めている。算数では目標値(100)と同等程度(98.4)に到達しているが、評定3と評定1の割合が42.9と二極化が見られている。どちらも学力の底上げが必要である。

○4年生[現5年生]は、国語ではR2年度と比べ目標値で+11.9と目標値(100)へ近づけることができたが、未だ到達度では評定1が45.5と約半数を占めている。算数ではR2年度と同等となり、目標値(100)から-15.3となっている。引き続き、底上げが必要な学年である。

○5年生[現6年生]は、国語、算数共にR2年度より目標値を下回り、全国との差が開き始めた。国語は目標値(100)で90.9となり、R2年度比-12.0となっている。評定の割合も全体的に下降し、1の割合が増加した(42.9→57.9)。そして算数は目標値(100)では国語と同程度の92.1だが、R2年度比で考えると-28.6と大きく下回ってしまった。これは、今年度から少人数指導がなく、上中位層にいた児童が中下位層に転落してしまったことが要因と考えられる。今後、手立てが必要な学年である。

○6年生[現中1年生]は、着々と学力を伸ばすことができていく。国語では目標値(100)に対し+10.8となり、R2年度に対して9.5上昇している。評定の割合も評定3が55.2→60.7と増加し、評定1が34.5→21.4と減少している。算数は、目標値(100)に対し昨年同様に+13.1となっている。評定の割合で見ると上層はほぼ同じ割合に対して、評定1が24.1→10.7へ減少し、下位層から中位層に上がった児童が増加していることが見て取れる。

II 各学年における成果と課題、令和4年度の取組 (○:成果 △:課題 ◇:継続する取組 □:新規の取組 ◎:改善する取組)

成果と課題について		今後の取組について
4年生	<p><b>国語</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○領域で見ると「話すこと・聞くこと」が目標値を上回った。問題別でも「話し合いの内容を聞き取る」が上回っていた(+1.1)。</li> <li>△目標値に届いていない項目が多く、全体的に底上げが必要である。特に「情報の扱い方」に関する領域では、目標値に対して-12.5下回り、「文章を書く」項目も目標値より-10.1下回っている。このことから、情報を活用し文章にするなど、日常的に書く活動に苦しさを感じていることが読み取れる。また、今後、評定1の下位層を中位層へ引き上げることが求められる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇文章を書く活動が全体の底上げの必須条件である。まずは、書くことへの抵抗感を減らすため、令和3年度より朝学習で取り組んでいる「視写」の時間を充実させていく。</li> <li>◎「書くこと」への日常的な取り組みが必要であり、R3年度まで取り組んでいた研修と関連させ、児童の興味関心を高めるような言語活動に取り組んでいく。さらに、毎日の「朝学習」での基礎基本を定着させる取り組みとして、短時間で取り組める読み取り問題などに取り組み、書くことを中心とする国語の力を底上げしていく。また、個別に見ると下位層の児童ほどと児童ほど漢字や言葉に関する項目が低くなる傾向にあり、「書くこと」と同時に語彙を増やす取り組みを合わせた学習を進めていく。</li> </ul>
	<p><b>算数</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○目標値(100)では98.4とほぼ目標値に達している。評定の割合で見ても評定3が42.9とあり、昨年の36.8から+6.1と順調に学力をつけている。習熟度別の少人数指導が効果的に活用され、個に応じて取り組みができていくことが結果に表れた。</li> <li>△問題別では「たし算・ひき算」が目標値より-6.2となり、一部児童にとって基礎基本の未定着が見られる。評定の割合では評定3が42.9と多いが、評定1も同じく42.9となっており、二極化が進んでいることが見られる。このことから、評定1の児童を評定2へ上げることが必要であり、全体の底上げが急務である学年と考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇習熟度別の少人数指導については継続し、特に下位層の児童への手厚い対応として、「たし算・ひき算」をはじめ「わり算」までを含めた四則計算の基礎の定着を図る。また、朝学習や宿題において四則計算を継続的に取り組むことでより習熟するよう努める。</li> <li>◎評定1,2の児童を引き上げるために、現在の習熟度別少人数の構成人数を単元ごとに見直しをかける。適切に人数を配置することで能力に合わせた学習を進め、下位層から中位層の児童を底上げを目指し、現在見られている二極化を食い止めていく。また、将来的には習熟度別少人数指導から一斉指導へと移行していくので、基礎基本を身に付けてながら主体的に学習に取り組む姿勢を育てていく必要がある。</li> </ul>
5年生	<p><b>国語</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○R2年度から比較すると目標値(100)では+11.9上昇し(79.1→91.0)改善が見られている。しかし、いまだ目標値(100)に届いておらず、引き続き学力向上の取り組みが必要である。</li> <li>△昨年同様に領域別では「書くこと」の落ち込みがみられ目標値に対し-18.8となっている。しかしこれは、「書くこと」だけに起因するのではなく、「説明文の内容を読み取る(-8.8)」「調べたことを発表する(-9.1)」の項目でも目標値を大きく下回っていることから「話す・聞く・書く」のどの領域でも課題を抱えていると考えられる。また、評定の割合から評定3が増加したが評定1が微減となっており、引き続き下位層の底上げが課題である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇朝学習では、ミニプリントを使い繰り返し「よむこと」「書くこと」への取り組みを行ってきた。学級での日々の取り組みが目標値(100)の改善へと結びつくと考えられるので継続していく。</li> <li>◎どの領域でも目標値を下回っていることを踏まえ、改めて児童の実態に合った言語活動を設定し、下位層である評定1の児童を評定2へ上げる努力をしていく。現状では二極化への対応として難易度によって選択できる言語活動を用意するなど考えられる。さらにR3年度まで校内研修で実践してきた児童が楽しいと思える授業作りをすることで国語へ気持ちを引き付ける工夫を取り入れ、全体の底上げを図っていく。</li> </ul>
	<p><b>算数</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○目標値(100)では84.7と昨年から+2の微増にとどまっており、全ての項目で目標値を下回っている。しかし、評定の割合では、評定3の人数の割合が増加した(21.1→31.8)。</li> <li>△問題別では「折れ線グラフ」が目標値より-21.8、「垂直と平行と四辺形」が-14.5と大きく離れている。昨年の課題を踏まえ、習熟度別の少人数指導で指導を続けてきているが、図形の学習を中心に下位層児童の定着に努力している。さらに一部児童は、四則計算に課題を抱えており、新単元での学習へ影響を及ぼしている。また、評定1の割合が半数を超える54.5となっていることも課題であり、早急に対応すべき学年ととらえている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇問題別で目標値から離れている単元では、既習事項の定着を図り、朝学習や宿題での復習を充実させることで知識の割れ落ちを防いでいく。さらに授業の中では「言葉」を使った説明や思考を記述する機会を増やし、基礎基本から一歩踏み出した主体的に学習に取り組む授業づくりに挑戦していく。</li> <li>◎R3年度まで習熟度別少人数指導がうまく機能していたが、R4年度からは学級での一斉指導での授業になる予定である。これまでに以上に二極化もしくは学力低下が懸念されることから、補充の機会をより一層大切に、放課後学習などで日々の積み残しを解消するよう努めていく。また、必要に応じて担任外も放課後学習の指導に参加する。</li> </ul>
6年生	<p><b>国語</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○目標値(100)で見ると-9.1となり、R2年度と比べて下降気味である。その中、基礎は-4.6と開きが小さく、問題別でも「漢字を読む」は目標値をクリアするなど基礎は比較的身につけていると捉えられる。</li> <li>△目標値から活用での課題が見られ、領域別では「書くこと」が目標値64.2に対し47.4と-16.6と開きが大きくなっている。言葉の意味理解や読み取ることはある程度できるが、表現する際に苦手意識や課題が見られると考えられる。また、評定3が10.8減少し、評定1が15.0増加していることから全体的に学力が下降気味であることがうかがえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎一昨年度、この学年は児童の実態に合った言語活動を展開することで大きく成長を遂げたことから、改めて児童の実態に合った言語活動を取り入れることが目標値へと近づける第一歩と考える。また、各教科の中でも書く活動を取り入れ、国語だけでなく日常的に書く機会を増やすことでより一層の底上げを図っていく。</li> <li>◎R2年度に目標値を上回った「主体的に学習に取り組む態度」がR3年度はマイナスに転じたことから、国語への苦手意識を持ち始めている児童がいることが予想される。そこで、児童が興味関心を持ち学習へ臨むことを重要視し、評定2~1の下位層を引き上げるよう努力していく。</li> </ul>
	<p><b>算数</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○問題別での「平均、合同、整数」では平均を上回ることができた。しかし、そのほかの項目では目標値を下回ることになった。</li> <li>△R2年度は評定3が6割を超えていたが、今年度は約半分の3割に大幅に減少することになった。目標値(100)もR2年度に比べ大きく減少することになった(120.7→92.1)。昨年まで習熟度別の少人数指導で適切に支援してきたが、今年度より一斉指導になったことでのしわ寄せが現れた結果になった。中でも「分数」と「図形の角」では目標値より大きく数値を下げており、思考を苦手とする下位層の低下が目立つ結果となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇本学年は、一斉指導の中で工夫された交流を行い、学び合う姿勢が育っている学級である。そのよさを活かし上層層が下層層を支援する授業の組み立てをより一層進めることで下位層の底上げを図っていく。</li> <li>◎今回の課題となった「分数」や「図形の角」など、既習の単元は朝学習や宿題の機会を利用して習熟を図る。また、一斉指導の形態で可能なことに取り組んでいく。授業の中に組み込んでいる習熟の時間をより増やすことや低位の児童など困り感を持つ児童へより一層の配慮をするなど、理解を深められる充実した手立てが必要になる。さらに放課後学習の時間の積極的利用などを通じ、全体的な底上げを図っていく。</li> </ul>

【低学年の指導について】

新1年生	<p><b>国語</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○児童にとっての学びの原動力は「楽しさ」であるということ踏まえ、教科書の内容をもとにしながらも、より自由な発想で言語活動を工夫していく。1年生の段階で「国語の学習は楽しい」と思えるような授業を体験させることが最も重要なことだと考えている。</li> <li>□できるかぎり早く平仮名の読み書きと、主語・述語といった簡単な文の構成を定着させ、完璧でなくてもよいので自分の考えを文章で表現させる活動を取り入れた。考える楽しさを実感するためには、表現とセットにすることが重要だと考えている。</li> </ul>	
	<p><b>算数</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□具体物を使い、操作活動を取り入れながらの授業は、1年生の入門期に不可欠なものである。まず、具体物が数字に置き換わるまでのこの段階をしっかりと行う。その後は、数の合成・分解にじっくり時間をかけ、それから加法・減法の学習へ進んでいく。時間がかかっても、この数の合成・分解を全員にしっかりと定着させることが1年生では大切なことと考えている。</li> <li>□国語同様に「算数の学習は楽しい」と思えるような授業を体験させることは、言うまでもなく最も重要なことである。</li> </ul>	
2年生	<p><b>国語</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○目標としていた入門期の学習内容や学習規律の定着は、多くの児童が達成できた。日常的に正確に平仮名を使用し、書き方も丁寧である。意欲的に学習に臨むことができていく。</li> <li>△助詞の「は」「へ」「を」の使い方が十分定着していない児童が見られる。また、漢字の定着が今後の課題である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇課題となる助詞や漢字の定着は、練習問題での反復練習ばかりではなく、「書くこと」の学習と連動して取り組めるよう改善を図っていく。</li> </ul>
	<p><b>算数</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○目標としていた入門期の学習内容や学習規律の定着は、多くの児童が達成できた。繰り上がりのある足し算や繰り下がりのあるひき算も十分に定着している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇現段階では、順調に力をつけている。今後は具体物から離れた思考へと向かう段階で、丁寧に児童への理解を図る必要がある。そこで、少人数指導を適切に活用することで実態に合った指導を心がけていく。</li> </ul>
3年生	<p><b>国語</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○どの領域でも大きく目標値を下回る中、「言葉のとくちょうや使い方に関する事項」は目標値を上回った。日常的に漢字の取り組みを丁寧に行っている結果が見られた。</li> <li>△領域で見ると特に「書くこと」の目標値との差が大きくなっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇「書くこと」に関しては朝学習の「視写」などを適切に使い、単純な練習ではなく楽しんで取り組むことを大切にしていきたい。また、国語の授業が楽しいと思えるような授業を第一にすることで、児童の興味関心を高めていきたい。</li> </ul>
	<p><b>算数</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>△どの領域でも目標値を下回っている。日常の授業では粘り強く取り組む児童の姿が見られていることから、今後の取り組み次第で学力の底上げは可能と考えている。問題別では、「ひき算」や「時ごとと時間」など、前学年の既習事項を活用する学習に課題が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇前学年での学習内容に課題を持つ児童へは個別に指導していく。また、放課後学習を活用し学び残しをなくすことで今後の学力向上への一歩としたい。</li> </ul>



### Ⅲ、学校全体における成果と課題、今後の取り組みについて

#### ① 成果と課題について

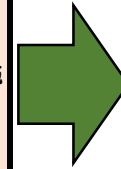
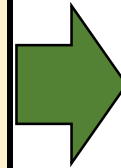
(授業づくり・環境づくり・習慣作り)

○:成果 ▲:課題

#### ② 改善の方向性について

(◇:継続する取組, □:新規の取組, ◎:改善する取組 等)

授業づくり	<p>○3年目を迎えた校内研修から、特に昨年度から取り入れた模擬授業は、今年度は同一授業についてグループごとに構想を練り、参観し合うことで様々なアプローチの手法を知ることができ、日常の授業にフィードバックができた。また、校内研修のめざしていた「児童の学ぶ意欲を第一に考えた授業」は、学習意欲を高めることが模擬授業を通して実感できた。</p> <p>○今年度よりGIGAスクール構想としてタブレットを活用した授業が始まった。学年の実態に応じて授業に活用され、新しい学習ツールの一つとなった。</p> <p>△退職人材での少人数指導は、時間の制限があり高学年が活用できなかったが、そのしわ寄せが今年度の釧路市標準学力テストからもはっきり出てしまった。</p>
環境づくり	<p>○必要に応じてタブレット等のICT機器が活用できるよう準備されている。高学年を中心に調べ学習や表現方法の一つとして活用され、確実に学習の幅を広げることにつながっている。</p> <p>△コロナ禍により教職員の勤務時間のスライドがあり、放課後学習の時間が15分ほど十分に取れない状態にある。昨年度の放課後学習は、学校滞在時間を減らすためにほぼ活用されなかったが、今年度は短時間でも低位の児童の学習の補充の場として活用を図っていきたい。</p> <p>○昨年はコロナの影響でできなかった長期休業中の補充学習を夏季2日間、冬季2日間実施することができた。</p>
習慣づくり	<p>○朝陽小スタンダード(本校の名称:まるわかり朝陽)をから、各家庭での活用を促した。宿題・家庭学習の約束や筆箱の中身などについて、学校と家庭で共通の認識を持つことができた。また、今まで各担任間であいまいな部分があった基本的な学習規律や学習用具についても、この中に明記したことで各学年・学年間のぶれがなくなった。</p> <p>○釧路市授業スタンダード(児童版)を基に、「学習環境チェック」を作成し、タブレットでチェックできるようにした。学期末にチェックすることで学年ごと児童の学習への取り組みを可視化できるようにした。</p> <p>△「家庭学習の手引き」を配布し、児童に効果的な家庭学習の進め方を示すとともに、日々の家庭学習の様子を把握し、指導・アドバイス・励ましを行った。学年相応の成長が見られているが、学校アンケートでは保護者と児童の達成率の開きがあることから、あらためて働きかけを行う必要があると考える。</p>



授業づくり	<p>□今年度までの校内研修は3年目を迎え一区切りをつけたことで、次年度は新しいテーマのもと研究を深めることになる。今年度同様に日常の授業にフィードバックできる内容となるよう全教職員で研究を深めていきたい。</p> <p>◇GIGAスクール構想の一環として施行してきたオンライン学習をはじめ、タブレットを活用した授業づくりを各学級で児童のスキルに合わせて取り組んでいくことが重要である。ICT委員会を中心に日常的にタブレットに触れる環境づくりを推奨していく。</p> <p>◇退職人材を活用した少人数指導は、今後も4年生以下までの取り組みとなる見通しである。そこで、少人数指導以外の学年では、中低位層の児童に照準を合わせ学力の底上げを図る、または友達との「学び合い」を計画的に取り入れるなど、児童の力量に合った支援ができるよう担任が日頃から計画的な授業運びを考える必要がある。</p>
環境づくり	<p>◇タブレットの効果的な活用法や実践例があれば、ICT委員会を通じて積極的に紹介する場を設ける。また、今までの学習内容においてタブレットを用いた方がより学習効果が上がるものについても検討し、活用を図っていく。</p> <p>◎放課後学習「すっきりタイム」(火、水、木)を有効利用し、補充の場として活用していく。担任外のサポートを強化することで各学年の中で特に学習につまづきを持つ児童への対応を行っていく。また、中位・上位層の児童には、より発展的な内容に取り組めるようにする。</p> <p>◇長期休業中に夏季2日間、冬季2日間の補充学習を行う。可能な限り学年2名体制で支援し、教職員全員でよりきめ細やかな指導を行っていく。</p>
習慣づくり	<p>◇宿題・家庭学習の約束や筆箱の中身などについて明記した「朝陽小スタンダード」を活用し、学習規律について全校共通して指導徹底する。合わせて年3回生活リズムチェックシートを使って生活習慣の見直しを行い、望ましい生活習慣の定着を図る。また、毎日の学習についてわかりやすく記載した「学習習慣表」「釧路市学習スタンダード」を各教室に掲示することで望ましい学習習慣を常に意識させる。</p> <p>◎「家庭学習の手引き」を活用し、児童に効果的な家庭学習のやり方を示すとともに、日々の家庭学習の様子を把握し、指導・アドバイス・励ましを積極的に行う。</p>